

東京多摩いのちの電話



鈴の音

▼「東京多摩いのちの電話」が一九八五年に発足して早や一九年になります。振り返って

これまでの長い間、本当に多くのボランティアの方々に支えられてここまできた事は奇跡に近いように思われます。「鈴の音」とは、どなたの命名か知りませんが、「東京多摩いのちの電話」の気持ちを、良く表現しています。

▼ボランティアがどんなに小さい、か細い、ささやかな声でも、かかってくるものはすべて、聴き漏らすことなくしっかりと受け止められるように、そしてその声が鈴の音のように、聴く者の心を打つものとして聴くことが出来るように、との願いと祈りがこめられているのではないだろうか。平和な世界の創出を願いながらその反対の誰も願わないとんでもない世界を創り出してしまふ愚かな人間です。

▼一つの願いのもとに集うボランティアが実践を通して、全身をもって、このさわやかな「鈴の音」を味わい、噛み締め、よりよく住みやすい社会を創り出すために前進することが出来ますようにと願います。感謝をこめて。

(井口 延)



公開講座

いのちを語る(アフガンからの報告)

中村 哲

はじめに

一昨日帰国し、また三日後に現地に戻ります。現地は私が20年いる中で、今が最悪の状態です。本日は「東京多摩いのちの電話」が主催ですが、「いのち」が操作されているという実態をみてきた私達の20年の歩みを紹介します。

「ペシャワール会」の紹介

「ペシャワール会」は福岡市に本部を置くN.G.O.です。ペシャワールはパキスタンとアフガニスタンの国境にある町で、ここを基地にして150人の医療スタッフで、1つの病院、4つの診療所を2つの国にまたいで運営しています。1984年、ハンセン病、かつて「らい」と言っていました。1984年、「らいコントロール(根絶)5ヶ年計画」があり、5年位なら自分に出来るのではないかと赴任しました。何もない状態で仕事を始めました。ハンセン病患者は約2400名で、治療センターの充実が私の任務でした。ハンセン病は手や足が崩れ、形成外科、整形外科、内科などいろいろな知識が必要なのに、ベッドは16床、注射器は数本。しかも、使い捨ての注射器を消毒液の中で何度も洗ってという状態でした。

アフガニスタンとはどういう国か

アフガニスタンは日本の国土の約1.7倍で、2000万人が住んでいます。5000m~6000mの山は珍らしくなく、険しい山岳地帯の合間、合間に住んでいる集合体がアフガニスタンです。冬に降り積った雪や氷河が夏に解け、川になり、豊かな緑を約束します。しかし「いのちの源」であった雪が地球温暖化のために消えつつあり、危機的な状況です。

イスラム教は精神的なバックボーンです。日

本人はイスラム教に対し恐ろしいイメージを持たされていますが、アフガニスタンの人々は家庭的な価値を重視する人々です。貧富の差が大きく、数10円のお金がなく医療を受けられずに死んでいくというのが実態です。文化の違いもあり、その土地に適した医療が必要です。

ソ連侵攻で起きた事

1979年12月ソ連軍10万人が共産政権擁護のためアフガニスタンに侵攻しました。アフガン戦争の犠牲者は200万人。難民600万人のうち半分はパキスタン側に避難しました。ソ連侵攻時に立ちあがった地元の反政府ゲリラの主力は農民です。アメリカは反ソ政策としてゲリラに武器援助をして、内戦は泥沼化しました。1989年2月ソ連軍が撤退を完了しても、内戦は収まらず、米ソの武器援助合戦は依然として続いていました。1991年10月にはソ連自身が崩壊したのです。

山村無医地区計画

難民キャンプ診療の体験から、私達は基本路線を大転換させました。「らい根絶計画」を実施するためには難民の帰還後を考えなければなりません。ハンセン病が多い所は伝染病、マラリア、腸チフス、アメーバ赤痢、結核が多い所です。マラリアで死にかけている人に「らいではないから診られません」という訳にはいきません。そこで「山村無医地区の診療モデル」を要所要所に確立し、組織的な医療を実施すべきだと考えました。内乱をかいくぐって、村から村へ、谷から谷へと調査しました。移動診療をする中で村人とつき合いを深める事が出来ました。日本人に対する反応が良く、日本人であるが故に助かった事はいっぱいあります。

共産政権崩壊とタリバーンの台頭

1988年から1989年にかけて「アフガニスタン難民帰還・復興援助」を掲げて世界中からN.G.O.200団体以上がベシャワールに押し寄せました。しかし「難民帰還支援」は見通しが立たず1992年共産政権が崩壊し、地方に散っていた軍勢は首都カブールに集中。3年間で約3万人の市民が犠牲になりました。1996年タリバーンが権力の座を握りました。タリバーンは悪魔の様だと報道されましたが、政治も何も知らない立場からは治安が回復され、ほっとしました。国際援助団体が撤退し、私達が診療所を建て、さあ、これからという時に襲ったのが大旱魃です。

大旱魃と井戸掘り

2000年5月W.H.O.が世界中に警告を出しました。ユーラシア大陸をまたにかけて、西はイラン、イラク、東は北朝鮮まで未曾有の大旱魃が襲ったのです。最も被害が大きいのはアフガニスタンという警告も国際社会は無視をしました。井戸が枯れ、栄養失調の子どもが続出しました。ちょっとした下痢で子どもが死亡しました。次々と村が消え、大量の難民が発生しました。1200万人が被害を受け、400万人が飢餓に直面したのです。戦乱と大旱魃の上に2001年2月には「国連制裁」が発動され、状況はさらに悪化してしまいました。

2000年7月より村人を総動員して、清潔な飲料水を確保するために、井戸掘りの努力が始まりました。今までに1000の井戸を掘り、約30万人が村を捨てずにすみしました。

今思う事

自分達の地域で平和に暮らせる様にコツコツ努力をしました。こんな悲惨な状態を世界が知らない訳がない。「100万人が餓死」という報告を書くのは簡単でも、実際の修羅場を目前にすれば、生やさしいものではない。しかし、やってきたのは「国連制裁」でした。オサマビンラディンをかくまっているという理由で。そんなことは一般の人々は知らず、無関心です。ニューヨークでテロ事件があり、アフガン空爆が

始まりました。アフガン人にしてみれば、なぜ自分たちが空爆されるのか、理解できない事です。貧しい者がますます貧しくなっているのです。

日本では年間3万人が自殺しているとの事ですが、死ぬつもりなら、何でもできるじゃないか。成田に降りると、日本人の表情がとても暗いのです。

アフガニスタンの人は物やお金はありませんが、精神的に気だてが良いのです。こんな極限状態になっても、本当に大事なものは何かを知っているのです。

悪夢の様な旱魃に対して「ベシャワール会」が行動を起こし、井戸を掘り、灌漑用水路を掘りました。小さなN.G.O.としては身に余る事業です。「国連制裁」で国際援助団体が撤退する中で、旱魃避難民が集中するカブールの貧民地区に臨時診療所も開きました。

私達が鉄則とするのは地元へ即した、地元の人々が必要とする支援活動です。アジアの同胞として、同じ目の高さをもって「国際貢献」「国際化」の何たるかを静かに問い続けるものでありたいと思います。

平成16年1月17日(土)、国分寺労政会館にて開かれたこの公開講座は、厚生労働省助成による自殺防止対策事業の一環として、全国各地の「いのちの電話」が主催、地域の皆様に自殺予防の大切さを訴える催しとして開かれたものです。

中村 哲氏の講演会場にて「ベシャワール会」への寄付金は28,500円でした。

プロフィール

中村 哲 (なかむら てつ)

ベシャワール会現地代表 PMS (ベシャワール会医療サービス) 総院長

1946年福岡市生まれ 九州大学医学部卒

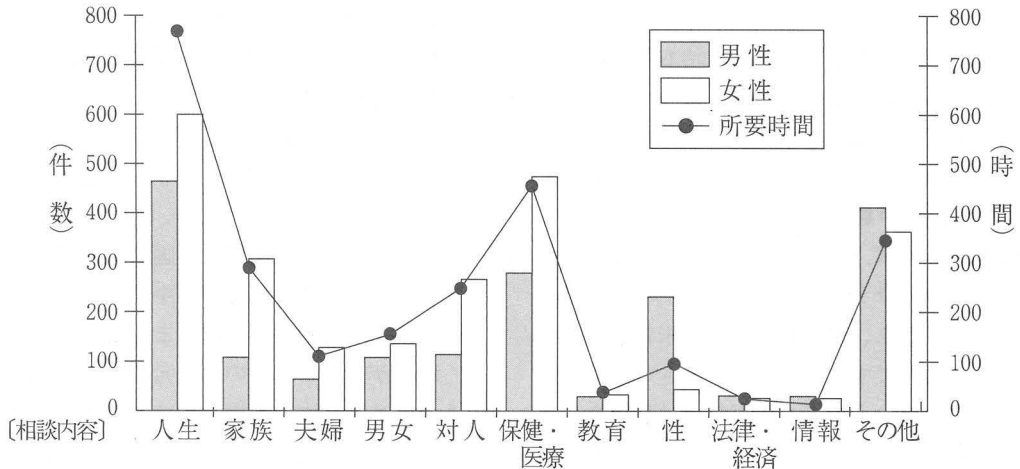
専門は精神内科 現地では内科、外科もこなす 国内の診療所勤務を経て、1984年パキスタン北西辺境州の州都ベシャワールに赴任

東京多摩いのちの電話 042-327-4343

2003年10月～2003年12月の相談概要

4,273回のベル

電話相談内容一覧



2003年10月から12月までの総受信件数は4,273件、うち男性が1,870件、女性が2,403件でした。1件当たりの平均通話時間は約36分で、男性が約25分、女性が約45分でした。

話をすることで気づくのですね

折りに触れて親戚が集まって談笑したり、街角で近所の人たちが立ち話をしたりということがいつの間にかなくなって、人と人が直に言葉を交わすことが少なくなり、携帯電話を片手にメールを打ち込んでいる人たちの姿が目立つようになりました。

「相談というより愚痴になるかもしれません」と話を始めた男性、サラリーマン生活3年目、仕事が忙しく土日にも休めないことが多い。今日は友達と会うために4カ月ぶりに休みをとった。このままサラリーマン生活を続けていたら幅のない人間になるのではないだろうか、学生時代の友達、同業種の人との付き合いはあるが、異業種の人、年代の違う人とも交流するにはどうしたらいいのか。体力的にはきついが、

精神的に余裕が出てきてこんなことを考えるようになったのかもしれない。「今は趣味の世界で人間関係を広げていけばいいんですね。考えているうちに分からなくなって電話したのですが、話をしているうちに答えを持っていることが分かりました。話をすることで気づくことができるんですね。実感しました」と電話は終わりました。

話をするには聴く人がいて始まること、これが「東京多摩いのちの電話」の役割りと改めて気づかされた電話でした。

(注・このコーナーは事例発表の場ではなく、相談傾向を解りやすくまとめたものです。このために具体的な内容は訴えてきた当事者でもわからないように、幾重にもフィルターをかけています)